

言語起源論史における〈人間〉と〈動物〉

鷗 飼 大 介

言語の起源については、18世紀頃から中・西欧の一部で議論され、それをテーマとした論考も記されるようになった。それ以前にも言語の起源について断片的・挿話的に述べた著述はあるものの、本格的に論じられるのは18世紀であり、19世紀近代の一步手前の世紀からである。18世紀は啓蒙の世紀とも呼ばれるが、聖書の言語観の信憑性が徐々に失われていく時代であり、時代の趨勢に応えるようにアカデミーおよびその周辺では、言語の起源や成立過程の説明が試みられていった。

18世紀の言語起源論に特徴的なことだが、言語を「発明する (invent, inventer, erfinden)」という言い方がよく見られる。「発明」ということは、それが一種の技術と考えられていることをうかがわせる。「発明」という語には、言語は知らず知らずのうちにできあがったのではなく、ある目的や意図をもって能動的に作り上げたものだという含みもあるだろう¹⁾。このように言語を「発明」されたものと捉える感覚は、現代のわれわれにはほとんど無縁なものである。また発明という語は、いったい誰が、あるいはどのような存在者が発明したのかという発明主体への問いをしばしば惹起する。実際に18世紀の言語起源論では、どのような存在者が、つまり神か人か獣のいずれの存在者が言語を発明したのかということが、問題の焦点となっていた。

本論では18世紀の言語起源論と、それを批判的に継承しながら新たな展開をみせていった19世紀の言語起源論をとりあげることによって、誰が、あるいはどのような存在者が言語を発明し使うのかという問いに対する答え方や、問い自体の変容を見ながら、人間と非人間（主に動物を念頭に置いているが、神のような超越的存在者をも含む）との間の連続や断絶がどう考えられてきたかを検討していく。このことを考えるうえで参考になるのは、アガンベンの論考である。言語の経験とその主体への問いは、アガンベンの比較的初期の著作（『幼年期と歴史』）からそれ以後も見られ、彼の問題関心の底流となっている。そのアガンベンは『開かれ』において19世紀におけるシュタインタールの言語起源論などに言及するなかで、人間と動物、人間と人間ならざるものを分節する知の装置を「人類学機械²⁾」と呼んでいる（Agamben 2002 = 2011）。言語起源論の歴史を問うことは、この「人類学機械」の作動の仕方を歴史的に見ることになるはずだ。以下の試論で描き出したいのは、人間が他の動物から、言語が他の技術や記号から峻別されて、人間と言語とが互いに根拠を与えあいながら特権視されていく過程と、その特権視が綻んでいく過程である。

1. なだらかな進歩

アガンベンは『開かれ』の一節で「人間であることを示す目印になってくる言語は、18世紀までは、綱や目の分類を飛び越えていた。というのも、鳥もまた言葉を話すと思われていたからである」と記している（Agamben 2002 = 2011: 49）。中・西欧の18世紀においても、このような見方は若干揺らいでいたとはいえ残存していた。たとえば18世紀の医師ラ・メトリは、猿に言葉を教えることは絶対に不可能ではないと述べている。その発声器官の欠陥を矯正して、聾啞者教育の先駆者であるアマンのような人物に言語教育を委ねれば、猿も言葉を話すようになるだろうと言う。ラ・メトリは「動物から人間へ、この推移は急激ではない」と述べ、人間と猿のような動物とのあいだに断絶よりも連続性を認めている（La Mettrie 1747 = 1957: 64）。もっとも、ラ・メトリは『人間機械論』という書名が端的に示しているように、動物も人間もゼンマイの集まりに喩えられるような一種の機械であり、物理機構に即して運動しているにすぎないと見ていたわけで、先のような言語観——発声器官を物理的に矯正・調整すれば猿が言葉を話すのも不可能ではないという見方——を表明するのも当然といえよう。

これに対してルソーは、ラ・メトリの名こそ出していないが、上のような見方を否定する。動物の言語と人間の言語とは性質がずいぶん異なるのに、それを「器官の相違によって説明している人がある」らしいが、「その説明を見たいものだ」と揶揄的に批判している（Rousseau 1968 = 2007: 17）。ルソーの見方は次のようなものだ。

彼ら〔動物〕のうち共同で働き、かつ生活するもの、ビーバー、蟻、蜜蜂は、お互いに意思伝達をし合うためのなにか自然の言語をもっており、わたしはそれを少しも疑わない。（中略）それらを語る動物たちは生まれながらにして言語を持っており、彼らすべてが、しかもどこでも同じ言語をもっているのである。彼らはそれを少しも変えず、少しの進歩をもたささない。約束による言語は人間だけのものである（Rousseau 1968 = 2007: 16-17、〔 〕内は引用者）。

ルソーは、ラ・メトリとは違って、人間の言語とそれ以外の動物の「言語」とのあいだにはっきりと境界線を引く。動物の言語は自然の言語であり不変であるのに対して、人間の言語は約束によるものであり変化すると述べている。しかし、（共同で働く生活する）動物が言語をもっていることまでは否定していない。ラ・メトリは猿のような動物が言語を話す可能性を認め、彼を批判したルソーも、動物が一種の言語をもっていることを認めている。

そしてルソーは言語の起源について、「人間の最初の言語、もっとも普遍的でもっとも精力的な言語、つまり集まった人々を説得しなければならなかった以前に人間が必要とした唯一の言語は、自然の叫び声である」と述べている（Rousseau 1962 = 1972: 62）。この叫び声は人も、それ以外の動物も発するような自然の言語とされている。つまり、ルソーは人の言語と動物の言語を

区別したのだが、始原形態において人の言語は動物のそれと共通している。

ルソーの言語観に大きな影響を与えたとされる、もう一人の啓蒙思想家コンディヤックにも目を向けてみよう。彼は記号を偶然的記号、自然的記号、制度的記号の三種類に区別する。偶然的記号 (les signes accidentels) はたまたま「一定の状況によって何らかの観念と結合された対象」であるが、コンディヤックはこれについての説明にあまり紙幅を割いておらず、重視しているようには思われない。自然的記号 (les signes naturels) は、「喜び・悲しみ・苦しみなどの感情を表出するために、自然が定めた叫び」であり、人も獣もこれを発する³⁾。制度的記号 (les signes d'institution) は「われわれがみずから選んだ記号」であり、観念と恣意的な関係をもつ (Condillac 1947 = 1994a: 78)。人はこれを自由に、自分の意のままに使いこなせるが、獣は使いこなすことはできない。この制度的記号は人の獣にたいする優越を示すものだが、他の二種類の記号は人も獣も用いるのであり、記号使用をめぐって人と獣の間には重なる部分が少なからずある⁴⁾。

コンディヤックが考える言語の起源とは、(身ぶり言語をともしなう) 情念の叫びであり、上の記号分類によれば自然的記号である。この自然的記号には、後に観念と恣意的な関係をもつ制度的記号という性格が与えられ、分節言語となるわけだが、自然的記号から制度的記号への進歩はなだらかで漸進的なものと捉えられている。

なおコンディヤックは言語だけではなく、さまざまな表現や技芸に着目している。「われわれの思考を表現するのに適したあらゆる技芸」として、「仕種、ダンス、話し言葉 (parole)、朗唱、記譜法、パントマイム、音楽、詩、雄弁、書き言葉、様々の国語の文字」など、じつに多様な技芸や表現様式をとりあげている (Condillac 1947 = 1994a: 19)。注目すべきことに、このなかで話し言葉は必ずしも特権視されておらず、数ある技芸のうちに含まれている。コンディヤックにせよ、ルソーにせよ、言語起源論を含む論述のなかに、一種の音楽起源論が組み込まれていることを考え合わせてもよいだろう (Condillac 1947 = 1994ab, Rousseau 1968 = 2007)。言語がさほど特権的な位置を占めていないことと相即するように、言語を「発明」し用いる主体としての人間も、他の動物との相違や隔たりが強調されておらず、むしろ漸進的な進歩の上に位置づけられているように思われる。18世紀の言語起源論者は人間と他の動物とのあいだに種々の相違を認めるとはいえ、断絶というほどの大きな隔たりはおおむね認めず、両者の共通部分に目を向けている。言語の起源を探るということはこの共通部分をまず注視するということでもあった。

2. 人間主義への転換点

1769年、ベルリン・アカデミーは言語の起源を懸賞論文のテーマとした。それは「人間はその自然的能力のみに委ねられて自ら言語を発明するに至るか。そして、いかなる手段によって人間はこの発明に到達するに至るか。この問題を明快に説明し、すべての難点を満足させる仮説を求めよ」というものである。応募した論文のなかで最優秀と認められ賞を獲得したのが、ヘル

ダーが提出した「言語起源論」である。

ヘルダーの論文は、もちろん後から振り返ってのことだが、18世紀に書かれながらも18世紀的な言語起源論からはみ出しているような面がある。19世紀の言語観を先取りして、その基本的な枠組みを予示しているとさえ言える。彼の論は18世紀から19世紀の言語論（言語起源論）へのいわば敷居にあり、質的な転換点に位置している。たとえばシャフは、19世紀のフンボルトやそれ以後のドイツの言語観の端緒に、ヘルダーを位置づけている（Schaff 1964 = 1974）。

先の懸賞論文のテーマは、ほかならぬ「人間」が言語を「発明」したということをすでに前提としている。受賞したヘルダーの論もむしろその前提に則して書いてあるが、その内容は少々入り組んでいる。ヘルダーはまず言語起源論の先達に批判の矢を向ける。彼によればコンディヤックは動物を人間にして、ルソーは人間を動物にしてしまったのであり、いずれも「人間と動物の相違についてともに誤りを犯した」（Herder 1772 = 1972: 21-22）。コンディヤックもルソーも人間と動物の相違を曖昧なままにしてしまったとヘルダーは難じるが、動物と人間とは、そして動物の「言語」と人間の言語とは、截然と区別されるべきものだ。

すべての動物は、ものいわぬ魚にいたるまで、彼らの感情を音で響かせる。だからといってどのような動物も、最も完全に発達した動物といえども、人間の言語の本来のきざしをごくわずかでももっているわけではない。この叫びをどのようにでも手を加え、洗練されたものにし、体系づけてみるがよい。この音を何らかの意図をもって用いるという悟性がそこに働いていなければ、どうして前述の〔感情に発する響きは、共感する生物には同じ感情をいだかせるという〕自然法則に従って、人間の自由意志に基づいた人間の言語が生まれるのか私にはわからない。子どもは動物と同じように、感情から発する響きを口に出す。しかし彼らが人間から習う言語は、全く別の言語ではないだろうか（Herder 1772 = 1972: 17、〔 〕内は引用者）。

動物たちの言語は人間にとって豊かでもなく、明瞭でもなく、対象を表現する点でも、人間の器官にとっても十分ではない——従って全然人間の言語（*seine Sprache*）になることができない（Herder 1772 = 1972: 26）。

はじめの引用の「この叫びをどのようにでも手を加え、洗練されたものにし、体系づけてみるがよい」という一文は、従来の、とりわけルソーやコンディヤックらによる言語起源論への挑発的な批判であろう。とはいえ前節でみたように、ルソーは動物が語る自然の言語と人間の約束による言語との違いを認めていたことを考えると、ルソーの言語観との違いはヘルダーが力説するほど大きくないともいえる。むしろヘルダーの論にはルソー（あるいはコンディヤック）の言語観を継承している部分があるのだが、ヘルダーの論が強調している点は、人間の言語は人間の自由意志に基いて発せられ、その音には「何らかの意図をもって用いるという悟性」が働いており、

もっとも発達した動物においてもそれは見られない、ということである。動物語 (Tiersprache) は人間の言語からかけ離れたものであり、悟性、そして人間固有の意識性 (Besonnenheit) が関与してこそ人間の言語が形作られる。

ヘルダーが人間と他の生物とを対照させて言うには、たとえばミツバチやクモが巣をつくるように、動物はときに驚くべき造形力や表象力をもっているが、それらは本能に縛られており力のはたらく範囲は限られている。それに対して、人間の表象力は限定されておらず、自由に活動し、広い展望にひらかれている。人間には、動物の盲目的な本能に代わって自由があり、動物の限定された造形力に代わって意識性があり、そして意識を働かせることによる反省能力がそなわっている。だから子どもがつい「感情から発する響き」は、悟性や意識性の所産ではなく、人間の言語とはみなされないであろう。

そのような意識性や反省能力の極限として理性がある。言語は理性を通して進歩し、また他方で理性は言語を通して進歩していくというように、言語と理性は互いに不可分とされる。「言語とは人類を他と区別する外面的特徴であり、理性は内面的特徴であると認め」られ、言語は理性のあらわれである (Herder 1772 = 1972: 52)。こうして言語は人間と他の動物を区別し、峻別するメルクマールとなる。ヘルダーは言語起源論の歴史において、言語が理性とともに、人間を他の動物から峻別する指標とみなされるようになる転換点にいる。ヘルダーにおいて言語の起源を探ることは、ルソーやコンディヤックのように人間と動物の共通部分をではなく、他の動物とは異なる人間の固有性を探ることである、とひとまず言うことができよう。

しかしながら、ヘルダーの論の重要かつ興味深い点は、従来の言語の動物起源論と言語神授説を斥けながら、人間のうちにある種の動物性と神性を認めたことにある。彼は一方で「人間が本源において、感情に発する言語を動物と共有している」(Herder 1772 = 1972: 4) と書きながら、同じ筆で「人間の魂は一個の創造者として、神の本質の似姿として、理性のあらわれとしての言語を自らつくる」(Herder 1772 = 1972: 171) と記している。言語を動物のように感情的に発しさえすれば、神のように創造もする人間は動物性と神性を宿しており、両者を取りこむかたちで人間の特徴が同定されているわけだ。こうした排除の様相——言語の動物起源論と言語神授説にたいする批判——と、包摂の様相——言語を発し創造する人間のうちに動物性と神性を認めること——はアガンベンの言う「人類学機械」を思わせる。ヘルダーの論は「人間」の形象をめぐるこのような錯綜をはらんでいる。

加えて、言語の「発明」という言い方とともに、言語の「形成」という言い方が登場することにも注目に値する。ヘルダーはアカデミーの問いに答える形で「発明」(あるいは「創造」) という語を用いているが⁵⁾、とくに『言語起源論』の第二部では「形成」という言い方がよく見られ、たとえば「言語の持続的形成」(Fortbildung der Sprache) といった言い方がなされている。言語は一回きりの「発明」や「創造」ではなく、継続的に「形成」され、しかもそれは家族・民族・人類といった共同性において形成され続けるのである。言語は歴史性の展望のもとに置かれ、言語を継続的に形成していく共同体という主体が想定されつつある。ヘルダーのこうした見方に

はすでに発明的言語観からの離脱の萌芽がみられるのである。

3. 顕在的な断絶と潜在的な連続

ヘルダーの言語起源論が先取りしていたように、言語起源論は18世紀後半から19世紀にかけて、人間と非人間（とくに他の動物）との断絶を力説する傾向を強めていったように思われる。しかし他方で両者の連続や共通性を認める新たな立場が登場し、人間の他の動物にたいする独立性は脅かされることとなる。

連続性（漸進的進化）を認める有力な論者の一人がダーウィンである。彼は言語について『種の起源』や『人および動物の表情について』で少しだけ触れている。また言語の起源については、『人間の由来と性淘汰』のなかで論じている箇所はあるものの、従来の種々の言語起源論を引きながら摸索しているようであり、まとまった言語観を呈示しているとはいいがたい。総じて、言語のありかたは彼の中心関心ではなく、心的能力の進化への関心の一部にすぎなかったようにも思われるが、おそらく時代や社会との共鳴もあって⁶⁾ 同時代の言語観に少なからぬ影響を及ぼしている。ダーウィンは、「分節言語は人間固有である」(Darwin 1871 = 1999: 56) としてうえで、こう説明している。

人間を他の動物から区別するのは、単なる分節化する能力ではない。というのも誰でも知っているように、オウムは話すことができるからだ。だが人間には、特定の音を特定の観念に結びつける大きな力がある。そして、このことは明らかに心的能力の発達に依存している (Darwin 1871 = 1999: 56)。

ダーウィンはいわゆる下等動物から人間にいたるまでの漸進的な進化を想定し、そのパースペクティヴのもとで、心的能力の発達によりながら特定の音と特定の観念とが結びついた言語を人間固有のものと見ている。ダーウィンのこうした言語観とその背景となる進化論的な考え方に困惑し、批判を加えたのがミュラーである。ミュラーは言語の起源について述べた論文のなかで、人間とその他の動物との共通点（五感をもち、快苦を感じ、記憶があり、比較や区別ができ、自らの意思をもち、恥や誇りの印や、愛や憎しみの印を示す）を列挙した後、それらにもかかわらず両者を決定的に隔てるものとして言語を挙げる。

では、獣と人との相違はどこにあるのか。人には可能であっても、獣の世界全体にはその印も兆しも見当たらないものとはなにか。私はためらうことなくこう答える。獣と人の間にある一つの大きな障壁 (the one great barrier between the brute and man) は「言語」である。人は話すが、獣は言葉を発したことがない。言語はわれわれのルビコン川であり、その川をあえて越えようとする獣などいない (Müller 1861: 14)。

ダーウィンも「分節言語は人間固有である」と述べていたのであり、ミュラーも同趣旨のことを述べている。しかし、若干ニュアンスが異なっている。ミュラーは言語を人間と獣とを隔てるものとして強調する。獣と人との間に横たわるのは——もっといえば、人が獣と同類になってしまうのを防いでいるのは——言語というルビコン川であり、障壁（防壁 barrier）である。言語がなければ、獣と似通った存在になってしまうという強迫的な不安を払おうとするかのように、ミュラーは言語の意義を再三説いている。

ダーウィンとミュラーの見解は、細部で食い違いをみせる。たとえば、人間には特定の音を特定の観念に結びつける大きな力があり、それが心的能力の発達によるとするダーウィンの見方に対してミュラーは異を唱え、それは人間より下等な動物からの心的能力の発達によるものではないとする。また、言語は一般観念を表示するという点で両者は同意するが、この一般観念を獣がもつかどうかについては対立する⁷⁾。ミュラーは以前から知られていたこととして、「一般観念をもつことが、人を獣から完全に区別する」（Müller 1861: 35）と述べているが、ダーウィンは『人類の起源』の第二版で、動物も一般観念を形成する能力を「少なくとも幼稚で萌芽的な程度ならばもっている」と反論している（Darwin 1874: 150）。こうした細部における両者の対立からもうかがえるように、ダーウィンは人間とより下等な動物との連続性を認めようとするが、ミュラーは連続性を断ち切ろうと躍起になっている^{8) 9)}。

なお、歴史言語学・比較言語学は19世紀に成立し発展した学問だが、そこでは動物に言語（に相当するもの）があるか否かという問いは、主たる関心の対象外であった。たとえば比較言語学の先駆となる研究を行ったフンボルトは、「言語というものは、人間性という深みの奥底から湧き出てくる」（Humboldt 1836 = 1984: 23）と述べ、あるいはまた「言語は人間そのものに属し、人間の本質以上の源泉をもたないし知らない」と言い切る（Humboldt 1968 = 2006: 93）。言語は人間を特徴づける要件となり、言語を用いない人間などいないというわけで、アガンベンの言葉を借りれば、「人間的なものと言語的なものが余すところなく一体化」しているということになるだろう（Agamben 2001 = 2007: 86）。

ただし、そこで想定されている人間とは一般的な人間——「ただたんに一般的かつ形而上学的に考えられた人間」——ではなく、特殊な諸関係に拘束されている人間——「現世のさまざまな地理的・歴史的諸関係のすべてに窮屈に縛られている人間」——である（Humboldt 1968 = 2006: 93）。なかでも重要なのは民族であり、まずもって精査すべきは民族の世界観が反映されている諸言語である。フンボルトがとりくんだ言語の比較研究とは、「言語の多様性の根拠を厳密に究明する」ものであり、「言語というものと、民族に備わっている精神の力とがどのように関連しているのか」という問題を解明するものであった（Humboldt 1836 = 1984: 19）。このように民族と言語とを緊密に結びつける見方は、ヘルダーの言語観の延長上にあり、それを徹底させたもののようにも思われる。ミュラーが人間と他の動物との間にあるとみなした防壁（barrier）の内側で、あるいはルビコン川の此岸で、要するに人間のみが言語を用いるという人間主義的な枠組みのもとで言語の研究が進められていった。

4. 脱・人間主義の傾き

これまでの論の流れをまとめながら振り返っておきたい。18世紀的な言語起源論は、言語を他の技芸や技術の一つとして位置づけており、言語をいささか特異で特権的な技術とする傾向はあったものの、その特異性は必ずしも強調されていなかった。言語によって人間は他の動物とは区別されるという見方は存在したが、ことさら力説されていたわけではない。むしろ人間以外の動物も「自然の言語」を話す、あるいは訓練次第で人の言語を話すことができるのではないかという考え方は、比較的自然なものであった。

ヘルダーの言語起源論は18世紀から19世紀の言語起源論への転換点に位置する。彼は18世紀的な言語起源論——言語神授説と言語の動物起源説という二つの対照的な説——を批判するなかで、ほかならぬ「人間」——神性と動物性とを内在させた「人間」——が言語を形成し続けてきたという見方を提示した。他の動物とは異なり「(内面的特徴として)理性をそなえ(外面的特徴として)言語を話す人間」という人間観が打ち出されたのである。それとともに、言語の発明観(なんらかの存在が言語を創造し発明したという見方)は、言語が共同的に形成され歴史的に継承されてきたという見方へ移行していった。

こうした見方を受け継ぐかのように、19世紀では、ミュラーを例として見たように言語こそが人間を他の動物から峻別する指標であるということは、ときに強迫的に言明された。当時、歴史言語学および比較言語学として形成されつつあった言語学は、人間と他の動物との相違よりも、人間における内なる相違——民族的な相違や、民族間における言語の相違——に注意を向けていった。それは人間主義的な学問であったともいえよう。しかし、人間とその言語を特権視する見方は必ずしも賛同を受けていたというわけでもなく、代表的にはダーウィンのように全ての生物種を漸進的進化の線上において、人間(と言語)を全面的には特権視しない考えも相応の影響力をもっていた。

ところで、以上のような18世紀後半における「理性をそなえ言語を話す人間」という見方の成立は、フーコー(『言葉と物』)による、18世紀末から19世紀にかけての西欧における「人間」の形象の出現についての議論と親和的な部分がある¹⁰⁾。しかし全面的に符合するわけではない。本稿で見てきたように、18世紀から19世紀にかけて西欧の言語にかんする知に見られるのは、フーコーが言うような断絶よりも、むしろ漸進的でゆるやかな変化である。言語観や人間観にかんする限り、フーコーが「近代の知」の特徴として描き出したものは、彼の言う「古典主義時代の知」の後半、つまり18世紀から萌芽的に潜在していたものだ。そもそも言語起源論は18世紀から本格的に書かれはじめたのであり、19世紀の言語起源論はそれとは異質なものであるとはいえ、18世紀の言語起源論を批判的に継承したものである。また、19世紀に開花する多様な諸民族の言語への関心は、18世紀におけるフランス啓蒙思想にも芽生えていた。本稿でとりあげた人物でいえば、ルソー、ヘルダー、フンボルトと時代を下るにつれ、徐々により多様な諸言語を視野に収め、比較の対象とするようになっていった。

「言語の起源」への問いは19世紀後半以降の言語学からは締め出されがちだったが、近年、とくに20世紀末頃からあらためて注目を集めている。新しく登場した進化言語学をはじめとして、生成文法、形態人類学、古人類学、行動生態学、神経科学、脳科学など、それぞれの分野から、あるいは領域横断的に言語の起源へのアプローチが試みられている。言語の起源についての探究が活気を帯びてきたことは、言語にかかわる知見の増大と諸科学の発展を背景にしているが、思想（史）的背景に即していえば、人間を特権視する見方が退潮してきたことと関連しているかもしれない。

人間以外の動物にある種の「言語」の使用を認め、言語について再考する傾向とともに、言語は必ずしも人間を特徴づけるメルクマールとはみなせなくなってきた。言語（・言語能力）という概念が揺らいでいる状況のもとで、ハウザー、チョムスキー、フィッチは言語能力を「広義の言語能力（faculty of language — broad sense, FLB）」と「狭義の言語能力（faculty of language — narrow sense, FLN）」とに区別して、言語能力という概念を二重化している（Hauser, Chomsky and Fitch 2002）。「広義の言語能力」は人間と他の動物が共有している言語能力を、「狭義の言語能力」は人間のみが有している言語能力を指しており、このようにして人間と他の動物との連続と断絶の両方を視野に収めようとしている。また他方で、アガンベンのような現代の哲学者は人間のインファンティア（言語活動をもたない状態）に目を向け、「人間はつねにすでに語る存在ではないということ」に注意していた。言語における人間主義は、さまざまな角度から再考されつつあると言うことができる。

注

- 1) 細かいことだが、ルソーは「言語の発明」という言い方以外に、「言語の制定（l'institution des langues）」という言い方もしている（Rousseau 1962 = 1972: 59,67）。彼にとって言語こそは「最初の社会制度（la première institution sociale）」である（Rousseau 1968 = 2007: 9）。ルソーは言語を発明される技術としてばかりでなく、約束によって結ばれる制度としても考えられていたようである。
- 2) 少し詳しく言えば、アガンベンは古代人の人類学機械と近代人のそれとを区別している。古代人の人類学機械とは、動物たちも言葉を話す（ことができる）という見方のように「動物の人間化」によって特徴づけられる。それに対して近代人の人類学機械は、ヘッケルによる「言葉をもたない原人」や、アガンベンの言う「ホモ・アラルス（言葉をもたない人）」のように、「人間の動物化」によって特徴づけられる（Agamben 2002 = 2011: 61-71）。古代人の人類学機械は、いってみれば動物を人間へと包摂することによって、近代人の人類学機械は人間から非人間的なものを排除することによって作動している。いずれにせよ、アガンベンは人間と非人間との分節のありかたや、分節が不明瞭になる場に注目している。
- 3) なお、コンディヤックは獣（bête）と動物（animal）とを使い分けている。「もし人間と獣とを区別するものには全く注意を払わず、ただ両者に共通するものだけを反省するならば、私はそこで一つの抽象を行っているのであり、それによって「動物」という一般観念を獲得するのである」（Condillac 1947 = 1994a: 100）。
- 4) さらにいえば、偶然的記号と自然的記号しかもたない人間も理論上想定されていることを考えると、

獣と人間との相違はそれほど力説されているわけではない。本論で述べたように、コンディヤックにおいては獣から人間に向かってなだらかな進歩が想定されている。

- 5) 厳密な区別ではないが、「創造」には神的な行為という含意が、「発明」には人間による行為という含意があるだろう。
- 6) 大澤は、進化論がダーウィンによって、19世紀の半ばに提起されたことには知識社会的な原因があると論じている。進化論が説得力をもち、進化論的な発想が学問や社会に広まるようになるためには、産業資本主義の十分な発達を必要とした。自然淘汰の理論は、技術革新をめぐるしのぎを削る産業資本の間の競争を連想させる（大澤 2012: 31）。
- 7) ミュラーは言語の歴史における一種の「生存闘争」や「自然選択」を認めている。「古代のもろもろの方言における類義語の過剰と、それによって類義語間で続いた生存闘争は、より弱い語、不幸な語、豊かではない語を破壊し、結果的に「一語」が勝利を収め、各言語においてそれぞれの対象をあらわす正式な名として認知された。非常に小さな規模におけるこうした自然選択の過程は、あるいは排除と呼ぶ方がよいだろうが、現代の諸言語、つまり英語やフランス語のような十分に古く年月を経た言語においてさえ見られる」（Müller 1861: 34-35、下線は原文ではイタリック）。ダーウィニズム的な概念はミュラーのような論敵にすら受け容れられている。
- 8) ダーウィンおよび同時期の言語研究者は、もはや言語を技術的な発明や考案によるものとは捉えていない。「今ではどんな言語学者も、どの言語も意図的に発明されたものではないと考えている。すべての言語は、ゆっくりと無意識のうちに、多くの段階を経て発展してきたものだ」（Darwin 1871 = 1999: 57）。
- 9) 19世紀の言語起源論を論じるにあたってとりあげねばならない人物は、本稿で挙げた人物の他にも、ルナン、グリム、シュタインタールをはじめとして数多くいるが、それらについては論じる用意がないため別稿を期したい。
- 10) ここでいう「人間」とは抽象的・一般的な人間であるばかりではなく、地理的・歴史的な諸関係に拘束された多様で特殊な「民族」や「国民」としての人間でもある。『言葉と物』は近代における「経験的＝先験的二重体」としての人間の出現について論じているが、ほぼ同じ頃に、特殊な民族・国民でありかつ一般の人間でもあるという「特殊的＝一般的二重体」としての人間の形象も出現してきたと考えられる。ただ、これら二つの形象が現在でもなお存続しているかどうかは議論の余地があるだろう。

参考文献

* 訳文は文脈などに応じて改めた箇所がある

- Agamben, Giorgio, [1978] 2001, *Infanzia e storia: Distruzione dell'esperienza e origine della storia*, Nuova edizione accresciuta, Torino: Einaudi. (= 2007, 上村忠男訳『幼児期と歴史——経験の破壊と歴史の起源』岩波書店.)
- , 2002, *L'aperto: l'uomo e l'animale*, Torino: Bollati Boringhieri. (= 2011, 岡田温司・多賀健太郎訳『開かれ——人間と動物』平凡社.)
- Condillac, Etienne Bonnot de, [1746] 1947, *Essai sur l'origine des connaissances humaines, Œuvres philosophiques de Condillac, Volume*, Paris: Presses universitaires de France. (= 1994a, 古茂田宏訳『人間認識起源論（上）』岩波書店.）(= 1994b, 古茂田宏訳『人間認識起源論（下）』岩波書店.)
- Darwin, Charles Robert, 1871, *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*, London: John Murray. (= 1999, 長谷川眞理子訳『人間の進化と性淘汰 I』文一総合出版.)

- , 1874, *The Descent of Man*, London: John Murray. (= 1967, 池田次郎・伊谷純一郎訳「人類の起源」『世界の名著 — ダーウィン』中央公論社.)
- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines* Paris: Gallimard. (= 1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物 — 人文科学の考古学』新潮社.)
- Harris, Roy ed., 1996, *The Origin of Language*, Bristol: Thoemmes Press.
- Hauser, Marc. D., Chomsky, Noam and Fitch, W. Tecumseh, 2002, “The faculty of language: What is it, who has it, and how did it evolved?” *Science*, 298, 1569–1579.
- Herder, Johann Gottfried, [1772] 1967, “Abhandlung über den ursprung der sprache,” *Sämtliche Werke V*, Hildesheim: Georg Olms. (= 1972, 大阪大学ドイツ近代文学研究会訳『言語起源論』法政大学出版局.)
- Humboldt, Wilhelm von, 1836, *Über die Kawi-Sprache auf der Insel Java* (Einleitung), Berlin: Druckerei der Königlichen Akademieder Wissenschaften. (= 1984, 亀山健吉訳『言語と精神 — カヴィ語研究序説』法政大学出版局.)
- , 1968, *Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften*, Band IV, Hrg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Erste Abteilung, *Werke IV*, Erste Hälfte, Berlin: Walter de Gruyter & Co. (= 2006, 村岡晋一訳『双数について』新書館.)
- 川合清隆, 2002, 『ルソーの啓蒙哲学 — 自然・社会・神』名古屋大学出版会.
- La Mettrie, Julien Offray de, 1747, *L'homme-machine*. (= 1957, 杉捷夫訳『人間機械論』岩波書店.)
- Müller, Friedrich Max, 1861, “The Theoretical Stage, and the Origin of Language,” Roy Harris ed., 1996, *The Origin of Language*, Bristol: Thoemmes Press, 7–41.
- 1873, “Lectures on Mr. Darwin's Philosophy of Language,” Roy Harris ed., 1996, *The Origin of Language*, Bristol: Thoemmes Press, 147–233.
- 大澤真幸, 2012, 『夢よりも深い覚醒へ — 3・11 後の哲学』岩波書店.
- Rousseau, Jean-Jacques, [1755] 1962, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les homes*, *The political writings of Jean Jacques Rousseau*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 1972, 本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波書店.)
- , 1968, *Essai sur l'origine des langues ou il est parlé de la mélodie et de l'imitation musicale*, texte établi et annoté par Charles Porset, Bordeaux: G. Ducros. (= 2007, 小林善彦訳『言語起源論』現代思潮社.)
- Shaff, Adam, 1964, *Jezyk a Poznanie*, Warszawa: Panstwowe Wydawnictwo Naukowe. (= 1974, 岩淵慶一訳, 『言語と認識』紀伊國屋書店.)
- Wells, George Albert, 1987, *The Origin of Language: Aspects of the Discussion from Condillac to Wundt*, Chicago and La Salle, Illinois: Open Court.